

社会福祉法人

風土記

《33》

兵庫県

明治150年に当たる今年NHK大河ドラマは「西郷どん」。その主人公・西郷隆盛が幕末、徳川幕府を倒さんと薩長主軸の官軍総大将として江戸総攻撃に向けて東海道を東進中、静岡・駿府に単身乗り込んできた武士がいた。徳川幕府の重鎮・勝海舟の手紙を携えた幕臣・山岡鉄舟だ。

幕府側は「江戸城を明け渡す」などの条件はのんだが、西郷が突きつける「將軍慶喜は備前藩に預ける」だけは幕府の忠臣・山岡が強硬に反対した。話し合いが決裂すれば江戸の町は火の海になる…。歴史を左右する一対一の息詰まる対決は、土壇場で西郷が折れた。命がけの山岡の真情が西郷の琴線を震わせたの

だ。後日、西郷が述懐する。「金もいらぬ、名譽もいらぬ、命もいらぬ人は始末に困るが、そういう人でなければ天下の偉業は成し遂げられん」。勝海

殉じた人々の菩提を弔うため、東京・谷中に禅寺「全生庵」を開いたほど、慈悲を大切にしていた。西洋文明が奔流する大變革時代に、仏教を軸にして日本の良さを守ろうと18



小曾根喜一郎



目加田栄

(今の神戸港)が開港した。明治維新後、イギリス、アメリカ、オランダ、フランス、ドイツなどが居留地を獲得して、国際貿易港として年々拡大、やがて世界四大海運都市の一つになっていった。

市制が施行された1889(明治22)年には新橋と神戸間の鉄道が開通し、人口も約14万5000人と開港時の10倍にも増えていた。明治政府の

誕生の源流に幕臣・山岡鉄舟

舟も鉄舟を評して「明鏡の如く、一点の私心も持たなかった」と、最後のサムライを称賛した。その山岡鉄舟が社会福祉法人「神戸光有会」(神戸市兵庫区夢野町)の源流にいた。

明治維新後、西郷に乞われて明治天皇の侍従を務めた山岡は、佐幕・討幕の立場を超えて国事に

84(明治17)年、「明道協会」を設立。「尊王奉仏」を唱えて、社会教化運動と社会事業を始め

た。その運動が全国に波及する中、東京に行つて明道協会の活動に刺激を受けた熱血志士、目加田栄が神戸で「三神明道協会」を結成した。寺社の復興に尽力した目加田は外来思想を払い伝統的な精神を取り戻す運動をめざして、1890(明治23)

ち上げた。「困窮する無告の民を救済する」慈善事業がまず取り組むべき活動だった。

当時の神戸の町はどんな状態だったか。徳川幕府が11万国と修好通商条約を結んだ結果、1867(慶応3)年に兵庫港

報国義会を結成、貧民救済始める

の生活は好不況の波に翻弄され、失業者の群れがあふれた。こうした状況下、「神戸報国義会」結成2年後の1892(明治25)年、貧民救済事業をスタートさせた。

神戸・楠町(今の兵庫区)に親の保護に恵まれない子どもたちを収容・養育する育兒院と、貧困で資力のない幼老病者を診察・施療する施療院を設けた。今の神戸光有会につながる福祉事業の第一歩だ。



明治41年当時の神戸報国義会本部

徳川家の忠臣で明治天皇の侍従だった山岡鉄舟の流れをくむ施設という事情はあるものの、神戸の一施設に対してなぜ?創設者の目加田栄が初代の皇族祭主であった久爾宮朝彦親王の内秘書で、伊藤博文ら政府高官らの知遇を得ていたことが大きかった。

富国強兵策により工業と貿易が奨励され、港湾荷役や造船所、製鋼所、運河開削工事などで働く労働者が大量に流入してき

元の大地主で実業家、小曾根喜一郎の存在が大きかった。友人の目加田栄と手を組み資金援助した。当初から幹事長を務め、1899(明治32)年に就任した会長職は1936(昭和11)年まで37年間も務めた。

もう一つ特筆すべきことがある。設立後、明治天皇・皇后陛下から金200円の下賜があり、天皇側近の三条実美から「盡(尽)忠報國(国)」の掛け軸が贈呈されたのをはじめ、宮内大臣・土方久元、農商務大臣・大隈重信、内閣総理大臣・松方正義、伏見宮員愛親王ら大物が次々と視察に

「福祉」という概念がなかった当時から、今でいう「救護施設」「養護施設」「老人ホーム」「母子寮」「病院」の五つの異なる施設を持つに至った。当時のセーフティネットだった。

行政からの資金援助があまり期待できない時代。施設の運営資金はどこから出ていたのか。地

なぜか。茂政は幕末の尊王攘夷派のリーダー、水戸藩主・徳川斉昭の九男で岡山池田家に婿養子で来て藩主になった。斉昭の七男が第十五代将軍となった徳川慶喜。つまり茂政の兄なのだ。

最後の將軍を必死で守った山岡鉄舟と弟の池田茂政。2人の威光と人格が神戸報国義会の出発を支えた。

三条実美から贈呈された掛け軸



神戸光有会(上)

年「神戸報国義会」を立

【総合監修】

# 社会福祉法人

## 風土記

《33》

兵庫県

神戸光有会の前身、神戸報国義会が貧民救済事業を1892(明治25)年に始めた当初から、財政基盤を支えたのが「小曾根財閥」と評された神戸財界の雄、小曾根家だ。

創設から現在の5代目、小曾根佳生理事長(60)にわたるまで法人のトップであり続ける小曾根家。神戸出身で日本を代表するジャズピアニスト、小曾根真もその一員である。

創設から現在の5代目、小曾根佳生理事長(60)にわたるまで法人のトップであり続ける小曾根家。神戸出身で日本を代表するジャズピアニスト、小曾根真もその一員である。

「父から引き継いだ以上、先輩がさまざまな試練を乗り越えて存続させてきたこの施設をなくしてはいけない」と26年の歴史の重みをかみしめる。小曾根家には特に精神的な主張はないが、施設の運営・経営には専

### 法人を支え続ける小曾根家

の発起人になるなど社会事業にも強い関心を持ち、「たとえ巨大な利益を得る事業でも国家・社会の繁栄に寄与しないものには手を出さない」という気概の持ち主だった。仏教の教えを基に慈善事業を興した友人の目加田米から神戸報国義

### 神戸光有会(中)



小曾根貞松



小曾根佳生理事長



小曾根有



小曾根真造

門家を配して任せる姿勢を続けてきた。救済事業は、食べるのにも困る子どもや親のいない子どもへの保護・養育(育児院)と、病に苦しむ年寄りから子どもまでの診療(施療院)から始めた。神戸市から行路病人の引き取りを頼まれるなど、次第に救済の問口を広げていき、ぎりぎりのところで生きる人を助けるセーフティーネッ

## 戦前に総合施設の基礎築く



神戸報国義会で生活する子どもたち(大正7年ごろ)

トを拡大していった。1925(大正14)年の市役所記録によると、年間延べ4万人、1日平均100人の困窮者を助けたとある。

前述した1936(昭和11)年に小曾根喜一郎からの土地寄贈を活用して施設を拡大した。神戸・荒田町(今の兵庫区)にあった従来の育児・施療の2施設に加えて、養老・母子・身体障害者の施設を新設した。ここで今日につながる総合施設の基礎が築かれたことに

なる。1941(昭和16)年の市役所記録によると、施設利用者は年間延べ9万人、1日平均250人に及んでいた。ところが、1945(昭和20)年3月、米軍機による神戸大空襲によって兵庫区内の全施設が焼失してしまった。

1年後に復興の動きが具体化し、1947(昭和22)年に現在の兵庫区夢野町に復興の拠点に移した。周辺が小曾根家寄贈の土地だったため、それらを売却して得た資金で、施設拡充、建て替えを進めることができた。1948年には兵庫県から生活保護法による保護施設(養老・救護・医療)、児童福祉法による児童福祉施設(養護・母子)の設置が認可され、3年後には新病院法に基づき病院開設も認可され、戦争によってスタズタにされたセーフティーネットがようやく復活した。

だが、施設の実態はどうだったか。福祉の原点といわれる生活保護法に基づき救護施設では、戦後の高度経済成長下でも「人間のゴミ箱」と呼ばれるような悲惨な状態だった。寝たきりの男たちが大部屋で10人一緒に生活しており、枕元で食事をすすめる人、酒を飲んでトラブルを起こす人、排便便をする人…が一堂にぎゅう詰め。当時、身体障害者福祉法や精神薄弱者福祉法に定められた施設に入所できない重度障害者を持つ人、つまり「福祉の谷間」にいた人たちのための受け皿として全国各地の救護施設が使われていた。そんな中、神戸光有会の現場で懸命に働く職員のアナウンサーが「救護施設」という本(一番ヶ瀬康子ら共著・ミネルヴァ書房・1988年刊)で紹介されると、全国の福祉・保健・医療関係者が実習・見学のため神戸の地にとっと押し寄せた。

【網谷隆司郎】

# 社会福祉法人

# 風土記

《33》

兵庫県

行き場のない子どもや  
 長兼養護老人ホーム「夢  
 野老人ホーム」施設長  
 を保護し治療しよう」と始  
 まった「神戸報国義会」  
 は、1992(平成4)  
 年、福祉事業開始100  
 周年を迎え、名称を「社  
 会福祉法人神戸光有会」  
 (神戸市兵庫区夢野町)  
 と変えて再出発した。

「名前は変わったが、神  
 戸市役所から行路病人の  
 収容・救護を囑託された  
 創立当時から果たしてきた  
 セーフティーネットの  
 役割は変わらなかった。  
 「今も施設のほとんど  
 は措置制度によるもので  
 す」と井上則俊・副理事

「長兼養護老人ホーム」夢  
 野老人ホーム」施設長  
 (76)は説明する。  
 行政庁からの委託を受  
 け、生活が困難で手助け  
 が必要とされた人たちの  
 入所を引き受ける代わり  
 に、その費用(措置費)

害者福祉の分野で、受け  
 るサービスを契約する制  
 度が始まったが、措置制  
 度を必要とする人たちが  
 今も多くいるのが現実  
 だ。  
 神戸市役所職員として  
 生活保護、児童相談など



中村陽二氏(左)と満保善夫氏

時定員34人と小規模な施  
 設で、身体障害者、知的  
 障害者、病弱者、傷痍軍  
 人、筋萎縮症の人などさ  
 まざまな人が入所してい  
 た。当時はそれぞれの障  
 害に応じた施設が少ない  
 時代だったので、知的・  
 精神・身体と重複障害の  
 人を受け入れる所がなく  
 て、そういう「福祉の谷  
 間」の人も受け入れてい  
 た。当時の施設は全国的  
 にも居住環境が悪く、「人  
 間のゴミ箱」というすご  
 い表現をした人もいたよ

## 100周年機に再出発

を必要経費として役所か  
 らもらう制度。日本の戦  
 後の福祉制度の根幹だ。  
 2000年度の介護保  
 険導入以来、高齢者、障

福祉分野一筋44年の経験  
 を持つ井上副理事長は、  
 これからの神戸光有会の  
 ビジョンと課題を話す。

側も安定経営のために財  
 政改革を含めていろいろ  
 努力していきたい」  
 現在ある10の施設も戦  
 後の福祉社会建設の中  
 で、国や自治体の法律・  
 政策変更に応じて、中身  
 を大きく変えてきた。神

うな状態でした」  
 やがて自立支援のため  
 め、「施設から地域へ」  
 の流れが出て、1988  
 (昭和63)年には全国に  
 先駆けて通所事業が認可  
 された。



井上則俊副理事長



梶岡正行氏

### 神戸光有会 ①

「収益事業が少ないの  
 で、いかに経営改革をし  
 ていくかが課題です。そ  
 のためにも今まできちん  
 としていなかった事務局  
 の体制を整備したい。20  
 代の職員が少ないので若  
 返りを図りたい。施設長  
 も今後は生え抜き、プロ  
 パーがやるのが理想だ。  
 行政側の財政事情が厳し  
 くなっているのを、法人

「当初は賛否いろいろ。  
 問題が起きたらどうする  
 という心配の声もあった  
 が、近くの医療機関の先  
 生たちが連携して24時間  
 バックアップすると言っ  
 てくれて道が開けた。こ  
 れで他の県にも広まって  
 いきました」

生活保護受  
 給者の自立支  
 援がより具体  
 的に生活訓練  
 へと向かい、  
 2007(平  
 成19)年に  
 「アルブル  
 野」が開設さ  
 れた。さらに就労支援を  
 加えた現在、救護施設  
 「アメニティホーム夢  
 野」から出て地域で生活  
 している障害者や一人暮  
 らしをめざしている障害  
 者を対象に、さまざまな  
 自立支援事業が行われて  
 いる。

## “施設から地域”先駆ける



本部と道路を隔てて建つ母子ホーム

中村陽二施設長(56)  
 が説明する。  
 「施設を出た人に対し  
 て、以前なかった食事提  
 供や金銭管理、訪問看護  
 などのサービスを増やし

た。生活介護では人付き  
 合いの練習や掃除や家事  
 の練習、就労継続支援B  
 型では清掃作業、喫茶作  
 業などの生産活動、レク  
 リエーション活動もあり  
 ます」  
 施設を飛び出す活動は  
 子どもの世界でも進んで  
 いる。児童養護施設「夢  
 野こどもホーム」と児童  
 厚生施設「夢野児童館」  
 は、新しいことに取り組  
 んでいる。

ホーム内には児童会が  
 あり、8人ずつ5つのユ  
 ニットごとに意見や要望  
 を出し話し合いで決めて  
 いる。  
 梶岡正行施設長(57)  
 は「食事メニューの変更  
 門限を遅くすること、毎



松下孝氏

「自立目標を達成してこ  
 こから新たな生活に乗り  
 出していく母子を見ると  
 うれしい。最近、発達障  
 害の子どもが増えてきて  
 いるので、今後は心理判  
 定員などのスタッフが欲  
 しい」と、網目の細かい  
 セーフティーネットの準  
 備にも手を尽くす。

【網谷隆司郎】



現在の神戸光有会

月のお小遣いアップな  
 ど、自分たちのことは自  
 分たちで決めるという自  
 治組織であることを実践  
 させています」と、うれ  
 しそうに話す。  
 小学生の放課後の児童  
 保育から始まった児童館  
 の活動も、中学生をリー  
 ダーにして近くの児童公  
 園でも遊べるようにした  
 ほか、保護者や地域の住  
 民と一緒に催す夏祭りや  
 卓球大会などに発展し  
 た。  
 明治期から続いている  
 母子生活支援施設「夢野  
 母子ホーム」には現在、  
 母親19人、0〜17歳の子  
 ども31人が暮らしてい  
 る。母親には職業紹介を  
 して半数以上が働いてお  
 り、小中学校に通う子ど  
 もたちには勉強の手伝  
 い、受験相談などきめ細  
 かい指導に努めている。  
 松下孝施設長(69)は